

インフラとは、社会を成り立たせるために不可欠な「社会の基礎構造」を指す言葉であるが、装置系の代表を例示すれば、道路、空港、港湾などの交通系や、河川堤防、ダム、砂防施設などの防災系があり、さらに上下水道などの生活系が公共的に整備され、国民へのサービスとして提供されている。

これら以外に、鉄道、電気、通信、ガスなどの公益事業系からのサービスも、重要な社会のインフラとして「装置インフラ群」を構成している。

利根川東遷事業などの「過去からの贈り物」

インフラは、膨大な費用と時間をかけて順序を追って整備されていくもので、時代に応じた技術力や世情とでもいうべきものを反映して、時代ごとに過去の事績の上に積み重ねてきたものである。たとえば、利根川は江戸時代初期に「利根川東遷」という河口を江戸湾から銚子に付け替えるという事業のうえに今日の治水や利水が成り立っている。

したのである。一六〇〇年代末に生まれた元禄文化は、歌舞伎にしても浮世絵にしても、今日でも日本が世界に誇る文化だが、江戸時代初期の人口急増という高度経済成長がもたらしたもののものだ。

そして、それはインフラ整備の成果だったのである。

一七〇〇年頃以降、全国的にはこの人口で幕末まで推移したことが、西欧による植民地化を防いだのである。人口調査を国勢調査というように、人口規模は国の勢いであるからだ。

日本が独立したまま江戸時代から明治時代に突入することができたのは、過去から積み上げてきたインフラという贈り物のおかげという一面があるのである。

現世代の怠慢

江戸時代とは異なり、現代は冒頭に示したように複雑なインフラ系がわれわれの生活や産業を支えている。インフラは国土への働きかけによる国土からの恵みの享受という面もあり、ほとんど国内に閉じているも

インフラとは何か・・・世代間の贈り物

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

この東遷事業によって、江戸は主として中小洪水から開放されたが、その代わりに銚子方面ではこうした洪水を引き受けざるを得なかった。今日の河川行政は、こうした利根川東遷事業などのすべてを引き継いで実施されている。過去のうえに現代の改良が積み重なり、それが次世代へ引き継がれて、次世代での改良がまた重なっていくのである。

したがって、今年の予算による今年分の利根川の治水力向上成果は、過去の事業による改善分のごくわずかな部分を占めるに過ぎない。言い換えると、利根川の現在の治水力は、江戸時代以降の延々たる努力が築き上げてきた成果がほとんどを占めていると言えるのだ。

われわれは、それに若干の改善を加えて次の世代に引き継ぐようとしているのだが、圧倒的な改善分は「過去からの贈り物である」ということなのである。過去から贈り物を受け取ったわれわれが、将来のためには何一つ贈り物をいたしませんとか、過去から受け取った分に比べてわずかな貢献しかできません、などと言える

のであることから、海外先進国との比較など、あまり関心を持たれない。

しかし、国際比較は重要なのだ。というのは、インフラ整備の度合いは経済力を規定するからである。たとえば、日本の自動車による移動速度は全国平均で時速六〇キロメートルであるが、ドイツでは九五キロメートルとなっている。

一八〇キロメートル先に行くには、日本では三時間かかるが、ドイツでは二時間以内に着ることができることになる。どの国の方が移動効率が高いか、つまりはどちらの労働効率が高いかなど、比較するまでもない。ネットワーク化した時速一三〇キロメートルで走行可能なアウトバーンを持つ国と、ミッシングだらけのうえに延長の三八%が暫定二車線で時速七〇キロメートルしか走れない国とが勝負などできるわけがない。

では、この日本は追いつく努力をしているのかというと、まったく反対に「差が開くこと」に熱心なのだ。公共事業を公的固定資本形成というレベルで見ると、一九九六年を一〇〇として二〇一六年には日本は五七というレベルにダウンしたが、ドイツは一三八と伸ばしてきたし、アメリカ

はずがないのは当然のことなのだ。全国の大河川は、江戸時代に入って元和偃武といわれるように平和な時代が生まれ、大名たちが戦国時代に磨いてきた組織力や技術力を用いて、有史以来初めて大河川の河道の付け替えなどの大工事を実施することができたのである。日本の大きな河川で江戸初期に諸藩が手を入れなかった河川はほとんどないと言ってもいいほどである。

これはもちろん安全な治水環境を生んだのだが、同時に多くの新たな耕作地を生み出すことになった。ある作家が、「家康は偉い。江戸初期に人口を二倍にしたからだ」などと述べているが、家康が通達を一通出したら人口が倍増したなどということが起こるはずがない。全国の大名たちの領国経営努力が耕地の拡大を生み、それが人口増をもたらしただ。

まさに「歴史の謎はインフラが解く」のである。

こうして、江戸時代の初期に千数百万人だった日本の人口は、一六〇〇年代のわずか一〇〇年ほどの間に、三、〇〇〇万人程度へと急増も一九〇とほぼ倍増しているのだ。

つまり、最近の日本のインフラの整備速度は一九九六年比で、ドイツの四一%、アメリカの三〇%というレベルに落ちてきたのである。この二〇年で、わが国はインフラという将来世代への贈り物をドイツの四割、アメリカの三割しか行わないレベルに下げたことになる。今のわれわれは、世界の先進国のなかでも、将来世代にもっとも冷淡な部類に属するのである。

防災インフラに至ってはさらにひどい状況で、豪雨が増えているのに、防災事業費を半減させてきたのである。倉敷市真備町の小田川氾濫は、防災事業費の削減が生んだものと言っても過言ではない。こうして、ここで五〇名もの尊い命が失われたが、この国はひたすら「いかに逃げるか」に議論を集中させて、「いかに防ぐか」という議論に収斂することを懸命に避けている。

過去のどの時代よりも現代日本人は次世代への贈り物を縮小してきた世代となり、世界中のどの先進国よりも将来への贈り物造りに怠慢な民族となったのである。

下言上用

Kagen
Jyoyou